春の鐘

上巻

立原正秋

新潮社

春の鐘（上巻）

昭和五三年七月一五日印刷
昭和五三年七月二〇日発行

定価九五〇円

著者　立原正秋
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
東京都新宿区矢来町七一　電話
業務部（〇三）二六六—五一一一
編集部（〇三）二六六—五四一一
〒一六二　振替　東京四—八〇八

印刷所　株式会社　金羊社
製本所　神田加藤製本

©Masaaki Tachihara 1978 Printed in Japan
乱丁・落丁本は，御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

◇目次

佐保路　5
都会　26
ふるき都　46
ものうい春　86
影と翳　106
不透明な空　166
光のなかへ　195
つゆの晴間　243

装画 原 万千子

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

春の鐘（上巻）

佐保路

東大寺転害門から法華寺までの東西にまっすぐのびている一条通りは佐保川を近くにひかえ、佐保路とよばれている。この佐保路の周辺には学校が多い。午後も三時をすぎると、どこからともなく学校帰りの児童や生徒達が群をなしてでてくる。転害門と法華寺のちょうどなかば辺に佐保小学校があるが、小学校の北側の緩やかな坂道を登りつめたところに、尼寺の興福院がある。この興福院にいたるすこし手前に、去年の十月開館したばかりの佐保美術館がある。

鳴海六平太は、いつも正午になると美術館をでる。そして坂道をくだり、佐保小学校の横をぬけて近鉄奈良駅の辺で昼食をとる。そして帰りは別の道をとる。奈良女子大学と称名寺のあいだの道をとり、佐保橋を渡って一条通りの法蓮町にでる。行きと戻りの道順が反対になる日もあった。休館日の水曜日をのぞくと、奈良にいるあいだは昼はだいたい同じだった。

寒い日だった。

この日、鳴海は、正午すこし前に美術館をでると、興福院にのぼってみた。来なれた境内で、ここからは若草、御蓋、高円、春日の山山がみえる。ほこりっぽい空で、しかし山山はかわることなく優しく横たわっていた。佐保美術館を建てはじめたのは一昨年の春だった。そのときから鳴海は月のうち半分は奈良ずまいになった。彼は高円山や春日山を眺めながら、大学の助教授をやめて三宅産業に入ってからの年月を振りかえってみた。関西の実業家の三宅藤一郎から、私の

蒐集の手伝いをしてもらえまいか、いずれは美術館を建てるつもりだが、と持ちかけられたのは、三十五歳の秋だった。新しい品がでるといつも知らせてくれる日本橋の不尽堂にたちよったとき、たまたま来あわせていた面識のある三宅から相談されたのであった。夙に蒐集家として知られている三宅の審美眼のたしかさは鳴海も知っていた。そしてその後もういちど三宅藤一郎にあい、条件もよかったので、あくる年の三月で学校をやめたのであった。好きな美術品と暮す喜びもあったが、なによりも自由な時間があったので転職したのであった。

月のうち半分は東京の家をあけたことが原因だったことは事実であったが、それにしても、足かけ十四年間の夫婦生活と、二人の子までなした家庭が、こんなにも簡単に毀れてしまうとは……。鳴海は苦いものを嚥みこむような感情で境内をでると坂道をおりた。悩みを抱いてこの坂道を登りおりしたここ四カ月がまだなまなましかった。

鳴海には、この四月に中学にあがる女の子と小学校六年生になる男の子がいた。濡雑巾のようになってしまった女でも子供達にとっては母親にちがいなかった。子供のことを考えると胸が痛んだ。鳴海が、妻と妻の相手の男のことを知ったのは、佐保美術館が開館してから半月ほど過ぎた頃だった。

男ひとりの昼食はわびしかった。朝は西大寺町のマンションでパンとコーヒーだった。それも面倒なときは、出勤途中の近鉄奈良駅の近くの喫茶店でトーストとコーヒーをとる。したがって昼はちゃんととらねばならなかったが、それは独りずまいの男のわびしさをかみしめるような食事だった。

鳴海はレストランで食事をすませ、美術館に戻った。

三宅蒐集品は美術館開館当時で、朝鮮陶磁器約千点、中国陶磁器約三百点、明治以降の日本画約百点を所蔵していた。そのなかで、朝鮮陶磁は、その種類と質の高さにおいて世界一と称され

ていた。三宅藤一郎がこれらの品を蒐めだしたのは戦後すぐで、まだ四十代のはじめだった。彼の家には、祖父と父が蒐めた美術品がかなりあった。子供の頃からそれらの品を一日あかずに眺めて暮してきた性格だったが、美にたいする執着というのか、たたかいが終って世のなかが自由になると同時に、それが一挙に表にでたかたちになった。いまでは、たとえば肌がきれいで瑕のない朝鮮陶磁の名品などは、いったん個人所蔵になると、まず当分は市場にでてこないが、戦後は筍生活に追われて大切にしていた名品をだす人が多かった。その点で、美にとりつかれた一人の男にとって戦後はさいわいだったと言ってもまちがいではなかった。目の前に一個の壺をだされる。この壺を、実証によってこれはこういう壺だ、という目と、美的直感によってこれはこういう壺だ、という目がある。実証なら学べば誰にも可能であった。しかし美的直感力は天性のものである。三宅藤一郎の審美眼は後者であった。

鳴海は大学で美術史を講義していただけに、ともすれば学者の実証の目がさきにたった。その意味で鳴海は三宅を尊敬していた。しかし三宅は、直感だけではだめだ、やはり実証は大切なことだ、と鳴海に言っていた。

佐保美術館の土地は、佐保丘陵の一角を平坦にならした三千坪で、そこに鉄筋で地上二階地下一階の延千坪の陳列室と収蔵庫がある。美にたいする執念といってもよい三宅藤一郎の産物であった。

館長としての鳴海の仕事は、いまのところ、所蔵品の一点一点を解説した本をつくりあげることだった。原稿は開館前にほぼ出来あがっていたが、開館には間にあわなかった。開館一周年までには全五冊の解説書を刊行する予定だった。

鳴海は館長室に戻ると茶を淹れた。

明日は休館日だった。これで三週間東京には帰っていない……。子供には会いたかったが、人

生の曲り角でのまされた苦い薬が彼を孤独に追いこんでいた。おまえは俺にとってなんだったのだろう……。妻の範子を考えてみたが、苦さだけがなまなましく、三十九歳になる一人の女の像は霞んでいた。

鳴海が、妻と相手の男がいるところを見たのは、まったくの偶然からだった。美術館を開館して半月ほど後の休館日に、彼は三日の休暇をとって東京に帰った。五日ほど前に三宅藤一郎が東京にでており、鳴海は家に帰る前に紀尾井町のホテルに泊っている三宅を訪ねた。三宅はいつもは赤坂のホテルを使っていたが、このときは赤坂の方が混んでいたのか、紀尾井町のホテルをとっていた。ホテルについたのは二時すぎだった。十二階でエレベーターからおり、三宅のいる部屋に向って廊下を歩いていたとき、十メートルほどさきの右側の部屋から二人づれがでてきた。彼は二人づれの女の方をみたとき、自然と足がとまった。まさか、と思ったが、妻の範子だった。つれの男はこっちに歩きだしていたが、妻はうつむいて立っていた。鳴海は歩いて行った。男とすれちがったとき、五十歳前後に見えた。男は緑色のネクタイをしめていた。どこかで会ったことのある顔だったが、思いだせなかった。鳴海は妻の前でたちどまった。うすい桃色のパンタロンの上下に、金色の首かざりをしていた。

「三宅さんがここに泊っている。話はあとできこう」

鳴海はうしろを振りかえった。男がこっちを見ていたが、鳴海と目があうと、いそいでこちらに背をみせて歩きだした。鳴海はそこに妻を残して三宅の部屋に行った。

三宅との事務的な話は簡単にすんだ。

「一昨日、不尽堂で、李朝の面取(めんとり)祭器をみたが、それをみておいてくれないか」

事務的な話がすんでから三宅が言った。

「これから早速みてきましょう」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「きみは数日こちらにいると言っていたな」
「そのつもりだったのですが、明日戻ります。向うにもまだ用が残っておりますので」
男とホテルの部屋からでてくる現場をみてしまった以上、妻と三日間も顔をあわせて暮すなど、鳴海には出来そうもなかった。
ホテルを出て、タクシーで日本橋の不尽堂にむかいながら、さっきの妻の姿をおもいかえした。耳輪もしていたし爪も染めていたようだった。若いときから派手にまわりを飾る女だったが、いまはもうまったく別な女に思えた。相手の男とも顔があっているのに不思議と嫉妬が湧いてこなかった。何故だろうと考えてみたが解らなかった。ただ妙な苦さだけが胸につまっていた。
祭器は口径二十二センチ高さ九センチの大きさで、佐保美術館所蔵品より肌がきれいだった。三百万円だというのでもらっておくことにした。親父の坂川五郎はおらず、長男の五兵衛が、十日ほどしたら親父が大阪に行くそうですから、そのときに届けられるでしょう、と言った。
不尽堂からでてきて目黒の自宅に帰るべく東京駅にむかって歩いていたとき、小さな本屋の前を通った。このとき不意に、妻の相手の男が誰であったかを思いだした。
鳴海は本屋の前を通りすぎ、ホテルの廊下ですれちがった男の顔をはっきり思いかえした。直接顔があったのは今日がはじめてだった。セックスカウンセラーという肩書で、テレビによくでたり、性に関する本を何冊かだしている医者だった。鳴海は新聞の本の広告でその医者の顔を憶えていたのである。本屋の前を通ったとき、本が、そのことを思いださせてくれたのである。妙な記憶残像だ、と鳴海はさらに苦い感情になった。赤い模様を散らした緑色のネクタイをしめていた気障な医者の顔が、もういちどゆっくりと鳴海のなかをよぎっていった。
目黒の家は、妻の生家の地続きの土地を借りて結婚した年に建てた三十坪の平家だった。妻の生家はその辺一帯の地主だった。

この夜、妻が最初に言ったのは、
「家をあけたあなたが悪いのよ」
という居直りだった。
もしあのとき、妻が自分の過失を認め素直に謝っていたら、俺は妻を赦していただろうか、と鳴海は館長室の窓からほこりっぽい奈良の空を眺めて考えた。
あなたが悪いのよ、と妻から言われたとき、鳴海は、よりにもよってつまらない男をえらんだものだ、と言った。
「そうよ。たしかにつまらない男ですよ。あなたのように古い壺ばかり眺めている高尚な人には、テレビにでてセックスの相談に応じたり、それこそくだらない本ばかり書いてベストセラー作家、あれ、作家というのかしら、とにかく売れるセックスの本を書いている男は、低俗な人間に映るでしょうよ。でも、あたしは生きているのよ。低俗でも気障でも、女を大事にあつかってくれるわ。なんでこんなに家をあけたのよ」
鳴海は妻の言うのをききながら、妙なことだ、と自分のなかを点検していた。妻が居直れば居直るほど、妻を遠くに感じはじめたのである。いっしょになった頃の、相手にたいして優しく、すべてが新鮮だった季節が、ずいぶん昔のことのように思えた。
「いつからだ」
「こんなこと、嘘をいってもはじまらないわね。去年の秋からよ。……おともだちにさそわれて、あるパーティーに行ったのよ……」
「それはきいても仕方のないことだ。どうせ通俗小説の筋書みたいなものだろう。二人の子をどうするか、という問題だけが残されている」
あの夜、俺は、一年間他の男に軀をまかせてきた妻を視つめ、自分を肉化しようと試みた、そ

れはたしかに成功した、あれは、相手の男にたいしての嫉妬ではなく、つれそってきて二人の子までなした女の肉にたいしての嫉妬であった、それは同時に妻が他人であることを知らされたかたちになったが……。

鳴海はその夜、妻の軀からはなれたとき、はっきり還るすべのない道を視たのであった。

その夜いらい鳴海は妻の軀を知らなかった。東京に帰るのが間遠になり、たまに帰っても、夫婦がめいめい別な道を歩いているのが見えるだけであった。一年間他の男に軀をまかせてきた妻を、そうとは知らずに抱いてきたのを考えると、そこに気がつかなかった夫もたしかにおかしかったが、すべてが判明になってしまってみると、妻が下手物の陶器に見えてきたのであった。下手物には下手物のよさがあったが、醜いのになると、それは限りなく醜かった。たしかに妻の肉に嫉妬し、自分を肉化はしたが、しかし相手の肉をこちらに取りいれて肉化したわけではなかった。目前に軀をひらいていた妻は、自分とは別の肉だったのである。かつてはこの肉と自分の肉とのあいだに血が通いあっていた。しかしいまはまったく別の物質にすぎなかった。その物質が醜く映ってくるまでそれほどの時間はかからなかった。

そうかといって男ざかりの軀がひとりでいられたわけではない。美術館を建てはじめたときに三宅産業が西大寺町にマンションを用意してくれたが、その前は東京支店に席があり、大阪には数日いて東京に戻る生活だった。大阪ではいつもホテル滞在で、その時分に通っていたバーがあり、そこの女の子を数度つれだしたことがあった。しかし一夜の情を交したあとに残るのは変な虚しさばかりで、浄化された、といった感情にはなれなかった。

美術館は朝十時に開き閉館は午後五時だった。館員は、館長の鳴海をいれて男子が五人、女子が四人だった。男子は、美術館を開く前から三宅産業美術部にいた者達で、女子はいずれも開館時に現地採用した若い子達だった。ほかに、大阪本社で働いていたのをこちらに移した雑用をや

る住込の大木夫婦がいた。夫婦とも五十歳をすぎており、大阪の八尾に家があったが、そこは長男夫婦にまかせていた。

明日の休日をどうするか……。ここで古い陶磁器に囲まれていると安らぎがあった。彼等は何百年も生きてきて動じない姿でたたずんでいた。揺れているのはいつもこちらの方だった。東京に帰る気にはなれなかった。いや、時間は自由に使えたから、東京に帰るのはいつでもできた。子供達には会いたかったが妻と顔をあわせたくなかったのである。

あと数日で二月もおわりだった。先週は、京都岡崎の三宅藤一郎邸で夕飯を馳走になって帰ってきたのだった。

いまの鳴海は、日日を、流れ行く時間に任せていることが多かった。これまでは、妻子を妻の生家に預けてある、という点で関西で安心して仕事ができたが、その家庭が毀れてみると、生を燃焼させる対象がないままたゆとうしかなかった。しかし流されているわけではなかった。

閉館後は、まっすぐ西大寺町に帰る日もあり、近鉄奈良駅ちかくの居酒屋で数本の酒にたゆとう心を預けるときもあった。

美術館を開いたのが十月だったので、十月、一月、四月、七月と年四回展示品の陳列がえをする、と規約に定めてあり、四月から展示する品物の写真をとりだしてよりわけていたとき、鳴海は、しばらく信楽に行っていないな、と窓ごしの空をみた。ここ数日というもの、しきりに旅への思いがむらがり、しかし現実にどこに行くというあてもなかったが、ふと信楽を思いうかべたのは、いまごろの季節、信楽を訪ねたことがあったからだった。それは二十代のおわりの頃だった。それからしばしば信楽を訪ねていたが、ここ二年ほどは訪ねるひまもなかった。

鳴海は受付に電話をした。

「そこはいまいそがしいかね」

「いえ、大丈夫です。なんでございましょうか。浅野ですが」
浅野とみ子の声だった。
「誰か大木さんの明日の午後の予定をきいてきてくれないか」
「はい、かしこまりました」
しばらくして大木宏吉自身が館長室にはいってきた。
「明日は別に予定はありません。八尾市の息子夫婦が遊びにくるだけです」
大木は登山帽をズボンのポケットにねじこみながら言った。
「休日を引っぱりだしてわるいが、信楽まで車をだしてもらえますか。帰りに伊賀上野によって、すきやきでも食べてこようと思ってね」
「ようございます。なんじにお迎えにあがりましょうか」
「一時でよいでしょう」
「わかりました」
大木は一礼して出て行った。
信楽の窯元は同じ苗字が多いので、窯元は、直純窯、三郎窯というように名前をつけて呼ばれていた。鳴海は八郎窯と親しく、当主はもう六十に近かったが、三年前の秋に東京で個展をひらいたとき、鳴海はパンフレットに短い賛を書いたことがあった。土と火を視つめ続けてきた陶工達の顔には、ときたま、こちらがはっとするような輝きを帯びた顔があった。そうした陶工と語りあうのは楽しかった。信楽の石本八郎、瀬戸の須藤唐七郎に、鳴海はその典型をみていた。二人とも野人だった。
この日鳴海は閉館後まっすぐ西大寺町に帰った。マンションは西大寺駅から歩いて数分のところにあり、三宅産業では、いちおう鳴海親子が生活できる広さを用意してくれたが、範子が、関

西はいやだ、と言いはり、けっきょく鳴海ひとりでは広すぎる家になってしまっていた。週に三回、掃除と洗濯をしてくれる中年の家庭の主婦がおり、今日は来てくれたとみえ、部屋がきれいにかたづいていた。食堂のテーブルの上に、新聞代の領収書と金がおいてあった。鳴海は朝でかけるときにいつもテーブルに一万円札を一枚おいてゆくのであった。

鳴海がこのマンションで支払っているのは、新聞代、牛乳代のほか通いの栗本鶴子の賃金ぐらいなものであった。ガス、電気、水道、電話代、冷暖房費はすべて自動的に三宅産業が支払っていた。したがって金銭的には恵まれている方だった。これは、ひとえに、三宅藤一郎の美にたいする執念、美を理解してくれる者にたいしての思いやりから発した待遇だった。鳴海の月給は四十万円だった。鳴海はそのうち三十万円を東京の自宅に振り込んでいた。残りの十万円が彼の生活費だったが、これで足りるわけはなく、ボーナスとは別に、三宅藤一郎個人から交際費という名目で年二回百万円もらっていた。この二百万円は大きかった。

鳴海は浴室の湯沸器をつけて浴槽に湯がでるようにしておき、部屋に戻って服を脱いだ。それから湯気のたちこめた浴室に入り、浴槽に軀を沈めた。剣道で鍛えた針金のような細い軀が、湯のなかですこしいびつになって見えた。そういえば、しばらく剣道場にも行っていなかった。一条通りの法蓮町から東大寺転害門にいたるあいだはバスが通っていない紅殻格子なども目につく古い町並である。その通りの中御門町に、習道館という剣道場があった。鳴海は奈良に棲みだしてから、ときたま日曜日にこの習道館にでかけた。土曜日の午後か日曜日でないと稽古相手がいないので、鳴海は美術館をぬけだして一時間前後竹刀を闘わせてくるのであった。習道館に行くと、二十七歳くらいの感じのよい青年がいた。いつも礼儀正しく、笑うと童顔になる青年だった。名を笹原透といい、墨を製造している老舗の長男だとのことだった。こちらは五段なのに、三段の彼にいつも三本のうち二本はとられた。しかし青年は稽古が終ると、御教授ありがとうござい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com